人間文化研究機構「北東アジア地域研究推進事業」
島根県立大学 NEAR センター拠点プロジェクト「近代的空間の形成とその影響」

第1回国際シンポジウム 2016【北東アジア：胚胎期の諸相】

総　括

島根県立大学北東アジア地域研究センター長
井　上　厚　史

1．はじめに

2016年度より始動した大学共同利用機関法人・人間文化研究機構地域研究推進事業「北東アジア地域研究」の国内５大拠点の一つとして島根県立大学北東アジア地域研究センター（NEAR センター）が選定され、今後６年間にわたって研究を推進していくことになった。

冷戦終結から20余年の間にアメリカの影響力が絶対的なものから相対的なものへと低下し、中国、インド、ロシア等の存在感が増すなか、日本をめぐる周辺諸国の地域構造は大きく変動しつつある。日本にとって、中国・ロシア・モンゴル・韓国・北朝鮮との間で生起している諸課題を解決へと導くためには、これらの地域を一体的に捉える発想の転換が必要であり、準拠枠としての「北東アジア地域」という概念に今注目が集まっている。

本学 NEAR センター（Institute for North East Asian Research）は、2000年４月の島根県立大学開学とともに、島根県の歴史的・地理的独自性を生かしつつ、北東アジア地域に関する先端的な研究を推進してきた。とくに本センターの特色である歴史・思想・国際関係部門の研究蓄積を活かし、今回の「北東アジア地域研究」プロジェクトにおいて、「北東アジアにおける近代的空間の形成とその影響」の解明に取り組むこととなった。

2016年11月19日、20日の２日間にわたって、島根県立大学交流センター・コンベンションセンターにて開催された今回の第１回国際シンポジウムは、世界史において「北東アジア地域」が地域としてのまとまりを形成し始める原初に立ち戻り、第１セッション「認識：自己認識あるいは歴史」、第２セッション「統治理念」、第３セッション「交流」、総合討論を通して、北東アジア胚胎期の諸相を明らかにすることを目標に設定し、活発な議論が交わされた。実施したプログラムは、以下の通りである。

シンポジウム・タイトル【北東アジア：胚胎期の諸相】

〇11月19日（土）

9:30～ 9:40　趣旨説明（井上厚史）

9:40～12:10　第１セッション「認識：自己認識あるいは歴史」

司会：李暁東（島根県立大学教授）

飯山知保（早稲田大学招聘研究員）「モンゴル・『中国』の接壌地帯としての12-14世紀華北」

井上治（島根県立大学教授）「『モンゴル年代記』の成立とその後代への展開の研究」

井上厚史「朝鮮と日本の自他認識」

中村喜和（一橋大学名誉教授）「古儀式派ロシア人のユートピア伝説〈白水境〉」

討論者：岡洋樹（東北大学教授）

12:10～13:30　昼食および休憩

13:30～16:00　第２セッション「統治理念」

司会：石田徹（島根県立大学准教授）

栗生澤猛夫（北海道大学名誉教授）「『胚胎期』ロシアにおける『統治理念』」

茂木敏夫（東京女子大学教授）「中国的秩序の理念」

岡洋樹「大清国によるモンゴル統治のモンゴル史的文脈」

都賢喆（韓国・延世大学教授）「朝鮮王朝の朱子学的支配理念と中国との関係」

討論者：李暁東

16:40～17:40　石見神楽「風の宮」鑑賞会

18:00～20:00　懇親会

〇11月20日（日）

9:30～12:10　第３セッション「交流」

司会：劉建輝（国際日本文化研究センター教授）

韓東育（中国・東北師範大学教授）「前近代日中思想界における『制心』問題をめぐる議論」

柳澤明（早稲田大学教授）「17～19世紀の露清外交と媒介言語」

討論者：波平恒男（琉球大学教授）、天野尚樹（山形大学准教授）、井上治

12:10～13:30　昼食および休憩

13:30～16:30　総合討論

司会：井上厚史

討論者：小長谷有紀（人間文化研究機構理事）、岡洋樹、娜荷芽（中国・内モンゴル大学講師）、バールィシェフ・エドワルド（筑波大学助教）

16:30　閉会

２．提起された４つの問題

２日間にわたって「北東アジアにおける近代的空間の形成とその影響」という研究テーマに関して、「認識」「統治理念」「交流」という３つの視点から全部で10本の発表と質疑応答があった。その結果、以下の４つの問題が提起された。

第１の問題提起は、北東アジアにおける「モンゴル」の位置づけに関するものである。飯山知保・早稲田大学招聘研究員からは「モンゴル・『中国』の接壌地帯としての12-14世紀華北―モンゴル帝国の統治と華北社会の変容―」という発表において、先鋭的な２つの問題提起がなされた。すなわち、①「宋元と明清との間に明らかな研究上の断絶があった状況を鑑み、元・明を通時的に考察の対象とする」こと、および ②「江南」中心に考察されてきた宋・元・明移行論から「非中国王朝の支配をより長く経験した10世紀以降の華北社会の歴史」に焦点を当て、「モンゴル支配下で華北社会がいかに変容したか」を明らかにすること、である。

郭郁（c.1259～？）と渾源孫氏という２つの華北士人の事例分析によって、飯山先生はモンゴル時代の華北の統治･官吏登用システムは「モンゴル王侯とのコネクション（根脚）こそが、モンゴル時代に官位を獲得し、昇進する際の関鍵」であったことを確認した上で、モンゴル時代の華北には「モンゴル帝国の分節的国家・社会構造」と「中国在来の統治システム」とが並存しており、南方中国の状況とは異なる華北における社会変動や「モンゴル高原あるいは中央アジアとの経済的・文化的結びつき」に注目しなければならないという提唱があった。

また、井上治・島根県立大学教授は「『モンゴル年代記』の成立とその後代への展開の研究」という発表において、「前近代から近代のモンゴルで著された歴史書の記述の変遷」に焦点を当て、13世紀中盤に成立したモンゴル語で書かれた最古の歴史的著作である『元朝秘史』から17世紀のモンゴル年代記、そして18～19世紀に成立したモンゴル年代記の特徴を概観し、『元朝秘史』以来の口伝に由来するモンゴル独自の歴史が、その後チベット、中国、ロシア由来の歴史的知識や情報によって修正・増幅されていったことが指摘された。

歴史認識が国家＝国民のアイデンティティに直結する観念であることを想起すれば、井上治先生の指摘する「モンゴル年代記」が内包する歴史記述の重層性は、そのまま北東アジア地域の歴史の変動と重なる問題である。今後のさらなる考察によって、「モンゴルの一国史形成」が「北東アジアの知的空間」によってどのように形成されたのかが実証されることを期待させるものであった。

第２の問題提起は、北東アジアにおけるロシアの位置づけに関するものである。今回のシンポジウムでは、中村喜和・一橋大学名誉教授による「古儀式派ロシア人のユートピア伝説〈白水境〉」、および栗生澤猛夫・北海道大学名誉教授による「『胚胎期』ロシアにお

ける『統治理念』―「ロシアとヨーロッパ」問題について考える―」という、二つの研究発表があった。お二人の先生が指摘されたのは、近代化の胎動期である16～18世紀のロシアには、東方（＝日本）に対する大きな関心があったということである。

中村喜和先生によれば、17世紀半ばのロシアにおいて断行されたキリスト教の宗教改革（儀礼改革）に反対した古儀式派（分離派、旧教徒）の人々の間には「白水境」というユートピア伝説（東方の大海に白い水の流れる島々＝日本が存在する）が信じられており、実際に1917年のロシア革命以前にこの白水境ユートピア伝説を信じて北海道や長崎に移住したロシア人一行がいたことが紹介された。17世紀半ばからロシアのコサックや開拓農民が黒竜江流域へ進出し始め、1689年にはロシアと清国との間に国教策定のためのネルチンスク条約が締結されたことはよく知られているが、その宗教的背景として白水境というユートピア伝説があったという指摘は、ロシア人が東方をいかに認識していたかという問題に関して北東アジア地域を横断する雄大な文化的＝宗教的水脈が存在していたことを再確認する大変興味深い指摘であった。

一方、栗生澤猛夫先生からは、16世紀以前のロシアにおいて重要だったのはあくまでも「ヨーロッパ」であり、「アジア」への関心は限定的なものにとどまっていたという発表がなされた。注目すべきは、13-15世紀のモンゴル支配期におけるロシアの「モンゴル化」という通説に対して、「筆者の考えでは、モスクワがロシア諸公国を傘下に収め強力な国家を創出することができたのは、ほかならぬモンゴル支配に抗してのことであり、それと戦い、支配を撥ね退けることによってなのである。支配自体はロシアにとってあくまでも「くびき」であり、桎梏にほかならなかった」のであり、この時代に逆説的にロシア正教の修道制が発達したことは、「苦難の時期」に「ロシア人の内なる精神的宗教的覚醒を呼び起こした」証であり、「モンゴルの宗教政策が穏健（寛容）であったこと」、および「支配自体が間接的であったこと」が関係しているだろうという興味深い指摘である。

一見、モスクワがカザン、アストラハン両カン国の併合以後「ユーラシア」帝国への道を歩みだしたように見えても、それは「ロシア人が正教徒として独自の文化と価値観を携えて東方へ進出した」と見るべきであり、ロシア人のアイデンティティはあくまでも「ヨーロッパ」にあったという栗生澤先生の主張は、中村先生が指摘された古儀式派における「白水境」ユートピア伝説の保持や極東への移住に通底するものであり、ロシアにおけるモンゴル支配（モンゴル化）をどう評価すべきかという大きな問題提起でもある。

ロシアという巨大国家におけるヨーロッパ的要素とアジア的要素の重畳は、ロシア一国の近代化にとどまらず、北東アジア地域全域の近代化の重層性を象徴する問題である。その意味で、柳澤明・早稲田大学教授の「17～19世紀の露清外交と媒介言語」は、輻輳するロシア・中国関係に言語の視点からアプローチした興味深い報告であった。

柳澤先生によれば、両国間における使節往来の際に使用された媒介言語は、当初はモンゴル語、次に満州語とラテン語、そしてロシア語になったが、18世紀前半までは「中央

レベルと地方レベルでラテン語とモンゴル語を使い分ける体制」が長期にわたって踏襲された。中国・ロシア両国ともに翻訳者養成の必要性を感じていたが、清朝では実務的なロシア語翻訳者を養成することはできず、ロシアも北京に留学生を送り続けたものの漢語習得は容易ではなく、清朝がロシア外交の主要言語として使用していた満州語の習得が中心だった。その結果、18世紀後半になると、満州語が主要な媒介言語としての地位を占めることとなり、その状況は1850年代まで続いたという。清朝とロシアを媒介する言語として実質的に「満州語」が大きな役割を果たしてきたという指摘は、北東アジア地域の近代化を考える上で忘れてはならない重要なポイントである。

第３の問題提起は、北東アジアにおける中国の位置づけに関するものである。茂木敏夫・東京女子大学教授「中国的秩序の理念―その特徴と近現代における問題化―」によれば、中国の伝統的秩序観においては「社会を、同質性、均質性の、一色に覆われた、のっぺらぼうな全体」（＝万物一体、兄弟たちの一家）として捉えているが、その一方で、中国王朝が定めた「礼」（＝制度）をある程度受容すれば内実への介入は行われず、結果として「多様性の共存」が実現されていた。ただし、その多様性は対等な関係にあるものではなく、あくまでも「唯一の、普遍的、そして倫理的な正しさ」をもつ中国（中華）を中心的＝絶対的な基準として序列化された世界に位置づけられるものであったという。こうした伝統的秩序観が継承される中で、満州の異民族によって建国された清朝は、中国と非中国の「二元的構造」を内包していた。例えば、ロシアとの外交交渉はラテン語、ロシア語、満州語などの非漢語によって行われ、中国国内においては漢語に翻訳されて伝統的な中国的華夷秩序の中に位置づけられた。そして、19世紀に台湾や新疆などの「辺境の危機」の時代を迎えると、伝統的な理念による再編成、すなわち「中華化、中国化、すなわち唯一の大文字の「文化」への教化、文明化」による「一体化、均質化」が強力に推進され、それは今日の共産党政権下の現代中国にも当てはまるという。

中国の秩序観や世界観を茂木先生のこの見解にもとづいて俯瞰してみると、北東アジア地域における中国の役割の特異性が見えてくる。中国は、「中華」という言葉に象徴されるような大中華主義を伝統的に保持しており、「中央」に君臨する。もし外部（＝周辺）世界や国家内部において摩擦や混乱が起きた時には、それが小規模なものであれば多様性や多元性は保証されるものの、それが大規模で体制全体を揺るがすような場合には伝統的な中華化＝均質化の力が強力に作動するということである。巨大国家である中国が保持する「寛容と不寛容」という相矛盾する特性は、北東アジアの近代化問題を考える上で極めて重要な指摘であろう。

岡洋樹・東北大学教授からは、「大清国によるモンゴル統治のモンゴル史的文脈」において、多様性を保持した大清「帝国」において周辺民族がいかなる理念の下に統治されたのかに関して、モンゴルの歴史記述に即して発表がなされた。清朝においてモンゴルは、支配氏族属下を指す統治区分概念である「外なるモンゴル（外藩）」として認識され、モ

ンゴルという民族統治の範疇が存在したのではなく、清朝に対する功績（服属以後の功績、清廷との親疎、清初における服属）に応じて爵位授与がなされたため、モンゴル王公の清朝服属以後の功績に関する伝記記述が多数残されているという。岡先生は、「清代モンゴルは、外藩と呼ばれる統治カテゴリーの設定により、内地＝中国本土とは異なる独自の統治理念と歴史叙述の場」を保有することができた。それを許した「多面相の帝国」である清朝が、「近代において単一の民族的文脈へと回収される経緯と、その落差が生み出す困難」に着目する必要があると力説されている。北東アジアにおける中国の位置づけに関して、「多面層の帝国」がさまざまな局面においてどのような素顔を見せるのかは、今後も注視すべき重要な研究テーマである。

第４の問題提起は、北東アジアの東端に位置する朝鮮と日本の位置づけに関するものである。都賢喆・韓国延世大学教授からは、「朝鮮王朝の朱子学的支配理念と中国との関係」において、朝鮮と中国との間の朝貢冊封関係について従来の見解とは異なる興味深い報告があった。朝鮮王朝は、前王朝である高麗時代に整備された科挙制度や教育制度を継承しつつ、程朱学を政治理念の基本に据えて国政を運営していき、その過程で「朱子学的秩序にとって危険であると判断」された陽明学を異端として厳しく排除した。そして、豊臣秀吉による朝鮮侵略（壬辰倭乱）による政治体制の混乱に対しても朱子道統継承運動によって乗り越えようとしたし、明清交代（華夷変態）という「正統」理念の根幹に関わる大事件に対しても「明中心の中華秩序を回復する」ことを選択したほどであった。

そのため、朝鮮が中国（明・清）との間に保持していた朝貢関係はともすれば支配・従属関係として解釈されがちであるが、「朝貢と冊封を中心にして歴史像を構成する場合、中国式観念によって彩色された「想像の秩序」を描く危険性」があり、実際には、高麗や朝鮮王朝は明と朝貢と回賜を行っている限り「無干渉主義」が原則であった。そして、中華的文化秩序の崩壊を意味した明の滅亡も、一方では「明の嫡流」を標榜していた朝鮮に「中華文化を守護し復興させるべき義務と使命」を自任させ、小中華意識から「朝鮮中華意識」へという変化をもたらしたが、他方では、巨大化する清の圧力に対して「たとえ夷であっても、文化的能力が備われば華となりうる」という現実的な夷狄観＝状況認識によって清の文物を見習おうという「北学論」を生み出したという。

この現実主義的・相対主義的観点を有していたことが、近代を迎えるにあたって開放的な対外観を保持する基礎になったのであり、原理主義的な儒教的統治理念に支配されていたかに見える朝鮮だが、実際には状況の変化に応じて危機を乗り越えようとする柔軟性を保有していたという都先生の指摘は、北東アジアにおける朝鮮の位置づけに対して再考を迫るものである。

韓東育・東北師範大学教授からは、「前近代日中思想界における「制心」問題をめぐる議論」において、「日本」の特異性を「制心」問題の解釈のあり方に見出そうとする独創的な発表があった。中国思想が伝統的に有する心の二つの捉え方、すなわち心の内在的制

御（セルフ・コントロール）力を強調する「心を以て心を制す」方法と、心の内在的格闘を外在的な物理的矯正によって行おうとする「礼を以て心を制す」方法は、江戸時代の日本に輸入されると、荻生徂徠や太宰春台などの古学派儒学者によって徹底的に前者の方法、すなわち「心を以て心を制す」ことの不可能性が主張され、外的規則の重視が主張された。しかし、後者（外的規制）によって本当に人心問題が解決できたのか、またなぜ中国では心をそれほどまでに重視したのか、を問わなければならないという。

この問題を再考する際のヒントとして、韓東育先生は３つの論点を提出している。第１は、丸山真男の「普遍主義的観念論が欠落している日本人には、他の民族、特に中国人にはほとんど見られない特徴が存在する。それは、観念論を離脱した実証主義、現実中心的な進歩観、進化論に対する伝統慣習の容認、そして空想と理想主義に対する無自覚的な排斥である」という指摘。第２は、中国と日本の中間に位置している朝鮮思想界の「心性論」への着目である。朝鮮実学の大成者として知られる丁若鏞が「心を以て心を制す」でもなく、「礼を以て心を制す」でもなく、「天を以て心を制す（以天制心）」という「天」の懲戒を重視したことに着目し、日本古学派の特異性を指摘している。第３は、アメリカの心理学者であるケリー・マクゴニガルの「人類の大脳には、ただ一個の自我が存在するわけではなく、様々に異なった自我が相互に競争し、主導権を競い合っている。この中には、すぐに満足したい自我もあれば、遠大な目標を持つ自我もあり、現在の自我があれば、未来の自我もある。」という説を援用しながら、「心を以て心を制す」という発想が科学的根拠を持つものであるという指摘である。

この３つの論点から改めて東アジアにおける日本の「制心」論（心性論）の特徴をまとめてみると、日本古学派の言説は、中国の制心論を否定しようとするあまり極端に走り、現代の心理学的知見に反した主張になっている。ポストモダン哲学において大切なことは、いつまでも日本古学派の「近代性」に拘泥するのではなく、むしろ中国の孟子以来の「心を以て心を制す」という観点こそ現代心理学が注目する「意志力」と通底するものであることに注目する必要があるだろう。「内外の極端な価値観を是正する」ことが大切であるという言葉で締めくくられた韓東育先生の論考は、難解ではあるが、北東アジアにおける「日本」の特異な位置づけ（極端な日本賛美や日本批判）に関する極めて重要な警鐘であると思われる。

また、井上厚史は「朝鮮と日本の自他認識―13・14世紀の「蒙古」観と自己認識を中心に―」において、13～14世紀にかけて勃発した「元寇」を取り上げ、それが朝鮮人と日本人の自他認識にいかなる影響を与えたかを検証した。モンゴルとの出会いは、朝鮮では高麗時代の征服時にも＜中国との代替＞として認識しようとし、政治的には臣従（臣事）しているものの、元が明に取って代わられるとただちに中国への臣従が復活し、以前にも増して＜中国との一体化＞が重要な政治的思想的課題として認識された。一方、日本ではモンゴルとの出会いは「元寇」を神風=「神明」によって撃退したという認識を広範囲に

生み出し、「神明」への帰依を要請した。そして神道への関心の高まりは、やがて神道への絶対的帰依（神国思想の隆盛）をもたらし、結果的に＜日本中心の世界観＞が成立したことを明らかにした。

「元寇」神話は日本人の対外観を決定的に変動させた歴史的要因であり、近代化過程においても、中華的世界観から離脱と天皇を中心とする大日本帝国の統治理念の形成にまで大きな影響を及ぼしていくことを指摘したものである。

今回提起されたこれら４つの問題は、はからずも北東アジア地域の近代化においてメイン・プレーヤーとして認識されてきたロシア、中国、日本のそれぞれ独自の役割を浮かび上がらせるとともに、近年急速に研究が進んでいるモンゴルや朝鮮の役割にも新たな照明を与えるものであったと言えよう。今回のシンポジウムで提出された重要な論点＝課題として、以下の３点をあげておきたい。

１.「ヨーロッパ」をアイデンティティとするロシアにおいて、「モンゴル」はいかなる影響を与えたのか、そしてそれはロシア人の「東方」への関心といかなる関係を有するのか。

２．中国が伝統的に保有する「寛容と不寛容」の秩序観は、大清帝国の近代化にいかなる影響を与えていくのか、そしてそれは周辺に位置するロシア、モンゴル、朝鮮、日本の近代化とどのような作用・反作用を生み出していくのか。

３．これまでバイ・プレーヤーとして認識されがちだったモンゴルの役割について、北東アジア諸国の近代化に与えた影響を明確にすると同時に、モンゴル自身はいかなる変容を遂げたのかという内外両面からのアプローチによって、モンゴルの役割を確定する必要がある。

３．総合討論と今後への課題

総合討論において、小長谷有紀・人間文化機構理事は本シンポジウム全体を「文明（異なる文化が相乗りできる土台）の接壌」というキーワードで総括した上で、①北東アジア地域は、一方で各地域における多様性を有し、他方でその多様性を包摂してこそ達成できる安定性という２つの特性を有していることを感じることができた、②北東アジアという地域概念を考える上で、〈空間〉と〈場所〉意識することが有効ではないか、③今後の展開として、異文化の「接壌」時の実態に迫るには国立民族学博物館との連携という方法もある、という指摘があった。

岡洋樹先生からは、北東アジアには「妙な安定性」と「多様性」が存在することを指摘し、北東アジア地域をどう見るのかについて、とりわけ日本国内の研究において「北（北方地域）に気づくこと」の重要性が強く主張された。

娜荷芽・内モンゴル大学講師からは、全報告に対する丁寧なコメントと個別の質問が行われた。

バールィシェフ･エドワルド･筑波大学助教は、本シンポジウムの全体的特徴として「モンゴルの存在感とダイナミズム」を取り上げ、北東アジア地域は地理的実体であると同時に変容していく空間でもあること、そして今回のシンポジウムで「西洋」への言及がなかったことへの疑問と、北東アジアにおける「日本」という存在の捉え方に関する問題提起があった。

本シンポジウムは、北東アジア地域における「近代的空間の形成とその影響」を分析するにあたり、まず北東アジア地域をどう捉えるのか、そしてそこにはどういう課題が存在しているのかを網羅的に概観することに主眼があったため、空間的には西のキエフ・モスクワから東の朝鮮半島・日本まで、時間的には９世紀から17世紀までを扱った広大かつ遠大なものとなったが、各発表者の真摯な研究成果の報告および討論者からの鋭い質問の応酬によって、重要な問題提起と解決すべき課題が明示され、大変充実した学術シンポジウムであったと自負している。

「北東アジア」という地域概念は、日本ではことさらに意識されることがないが、昨今の国際情勢はこの地域が今や世界に大きな影響を与える地域であることを日々教えている。経済発展を続ける地域であると同時に、政治的・外交的な不安定要因を抱え込んだ地域でもあり、今後ますます「北東アジア地域」の重要性は増していくだろう。

６年間を要する本研究プロジェクトの５大研究拠点の一つとして、本学における研究成果がこの地域の安定的発展と相互理解を推進できるような研究成果を挙げられるよう、メンバー一同精進していく所存である。

（INOUE Atsushi）